

●横井佑未子 (1980~)

『メモリアム III』

オーケストラのための (2012~13/19)

人はどのように物事を覚え、そしてそれを忘れるのだろうか。

一度会ったことのある人と再会するとき、我々は記憶の中のその人と同一人物であると認識する。場所や、天気や、服装など状況の違いによってすぐには気づけないかもしれないけれど、声やしぐさ、顔、雰囲気などその他の様々な特徴から『その人だ』と判断することができる。

音楽の場合はどうだろうか。これは聴いたことがある。あの曲に似ている。知っている曲だったけれど、アレンジが違って気づかなかつた……など、そのとき耳に入ってきているものと、記憶とを常に照合しているのではないか。

全く『同じ』でなくとも、共通の特徴が多数認められれば、『一部変奏された同じ曲』として受け取ることもあるだろう。

とすると、『同じ』だと判断し得るのには、どこまでの変奏を許容できるのだろうか。何を判断基準にしているのだろうか。印象に残りやすい素材と残りにくい素材の違いは何だろうか。どれだけの情報を、どれだけの時間、記憶に留めておけるのだろうか。

また、全く『同じ』だったとしても、初めて聴いたときと、そして二度目、三度目に聴いたときとでは捉え方が変わるのではないか……

これらの疑問から『記憶に関する実験・経験ができる場』として本作品の構想を得た。

尚、タイトルの『MEMORIUM メモリアム』とは、ラテン語の記憶『memoria』と場所を表す接尾語『-um』を組み合わせた造語である。

[横井佑未子]

3 Fl (Picc) / 2 Ob / E-Hrn / 2 Cl / Bs-Cl / 3 Fg (C-Fg) - 4 Hrn / 3 Trp / 2 Trb / Bs-Trb / Tub - Timp - 3 Perc (I=Snare Drum / Mar / Cym / Tam-Tam II=Spring Coils / 2 Cym / Vib / 4 Tom-Toms III=Tubular Bells / Crotales / Gongs / Tam-Tam / Bass Drum / Claves) - Hrp - Pf - Strings (14-12-10-8-6)

初演：2013年4月29日~5月5日

フランス・ミュージック(ラジオ・フランス)の音楽番組「アッラ・ブレーヴェ」内での放送
アンクシュ・クマール・パール指揮 フランス国立管弦楽団

委嘱：フランス・ミュージック(ラジオ・フランス)の音楽番組「アッラ・ブレーヴェ」

●ミカエル・ジャレル (1958~)

『4つの印象』

ヴァイオリンとオーケストラのための協奏曲 (2019)

わたしの作品には描写的な次元をもつものも多いが、本作についていえば、[あくまで音楽的なものとしてある]楽想や、小さなモチーフを展開させたいと思った。実のところ、ヴァイオリン協奏曲を書くのは4回目、この楽器へのアプローチ法を毎回、違ったものにしてしている。

芸術とはわたしたちの創意、人間の創意であり、とくにわたしにとって、諸芸術のなかでもっとも美しいのは、おそらく音楽である。音楽芸術は、人間によって人間のために作られた、メッセージであり証言である。とするならば、協奏的な音楽は、[このメッセージ・証言を介して]作曲家、ソリスト、指揮者、オーケストラ、聴衆のあいだに独特の関係を築くものであり、それゆえにこそ、わたしはこのジャンルに惹きつけられてきた。また、協奏的な音楽は、しばしば、好奇心にあふれ[わたしの音楽を]面白いと感じてくれる、比類なき音楽家たちとの出会いの場ともなる。この出会いがあるから、協奏曲を書きたいとも思うし、協奏曲を書くことが必要ともなる。

『4つの印象』は4楽章からなる。第1楽章は、緩やかな導入をもった急速な楽章。第2楽章は、いわば小さな「カプリッチョ」である。第3楽章は、緩やかにして神秘的な時であり、最後の第4楽章は、再び急速な楽章となる。

この協奏曲は、ルノー・カプソンに献呈されている。

※[]は訳者による補足

[ミカエル・ジャレル/藤田 茂 訳]

Vn Solo - 3 Fl (A-Fl / Picc) / 2 Ob / E-Hrn / 2 Cl / Bs-Cl / 2 Fg / C-Fg - 4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb / Tub - 4 Perc (I=Vib / 2 Bongos / 3 Cym / Tam-Tam / Tubular Bell II=Crotales / Marimbaphone / Cym / Chinese Cym / 2 Tam-Tams III=Glock / Tubular Bells / Bass Drum / 2 Tam-Tams IV=Timp / Cowbells / Temple Block / 3 Cym / Tam-Tam) - Hrp - Pf - Strings (14-12-10-8-6)

献呈：ルノー・カプソン

●ミカエル・ジャレル

『...今までこの上なく晴れわたっていた空が突然恐ろしい嵐となり...』

オーケストラのための (2009)

今回が日本初演となるこの作品は、ハープならびに多様な打楽器を含む三管編成のオーケストラのために書かれている。しかし、ジャレルは、これをマスとして響かせるよりは、楽器群の分割を進めて、力強くありつつも透明感のあるテクスチャーを編むことを目指している。いかにもジャレルらしい詩の一節であるかのようなタイトルは、古代ローマの哲人、ルクレティウスの『事物の本性について』を参照するものであるという。実際、この音楽には、ルクレティウスが透徹した目で見つめた気象現象を彷彿させるところがあり、さまざまな音形が、まるで大気中を運動する粒子であるかのように、一気に加速したかと思えば、再び緩やかな漂流を始める。しかし、細川俊夫氏の問いに答えてジャレルが明かしているように(58~59頁参照)、このタイトルは、この作品のアイデアを生じさせた二重の状況とも関わり合っている。ひとつは、ウィーン在住時のジャレルが日常的に経験していた、静かな住居と通りの喧騒の驚くべきコントラスト。もうひとつは、幸せな知人家族に前触れもなく訪れた突然の娘の死。この音楽に何らかの物語を読みとることは難しいにしても、ここに現れる動と静の対比にはジャレルの体験が投影されているといえよう。

この作品は、スイス・ロマン管弦楽団の委嘱作であり、2009年4月20日、ジュネーヴのヴィクトリア・ホールにてマレク・ヤノフスキの指揮する同管弦楽団によって初演された。

[藤田 茂]

3 Fl (A-Fl / Picc) / 2 Ob (E-Hr) / 2 Cl (Es-Cl) / 2 Fg (C-Fg - 4 Hr) / 3 Trp / 3 Trb / Tub - Timp - 4 Perc (I=Vib / 2 Cym / 3 Bongos / Tri / Mark Tree II=Glock / Tom Grave / 3 Cym / 2 Wood Blocks III=Tubular Bells / 3 Cym / Tam-Tam / Bass Drum IV=2 Tam-Tams / Cym / 2 Temple Blocks / 2 Spring Gongs / Tri) - Hrp - Strings (16-14-12-10-8)

初演：2009年4月20日 ヴィクトリアホール ジュネーヴ
マレク・ヤノフスキ指揮 スイス・ロマン管弦楽団

委嘱：スイス・ロマン管弦楽団

●アルバン・ベルク (1885~1935)

管弦楽のための3つの小品 作品6 (1914~15/29)

ベルクが1914年から15年にかけて作曲し、師シェーンベルクに献上した管弦楽曲。ほとんど交響曲的とも言える三部構成(冒頭楽章、緩徐楽章、終楽章)の本作品は、しばしば「マーラー的」と評され、他方で、その色彩豊かで精巧なオーケストレーションはドビュッシーを彷彿とさせる。歌曲のように伸びやかな旋律と複雑な主題発展法に、ベルク特有の語法が見て取れる。

第1曲：前奏曲

打楽器群のトレモロと波打つ低音楽器に始まり、ファゴットが主題を奏する。様々な音色で反復される主題は、その断片から次の新たな主題へ、接木のように変化し展開する。増大する音量、密度は、やがて上行音型と下行音型が渦巻く飽和点へと向かう。その動的エネルギーと対をなす静的な終結部では、同音反復と主題の断片が柔らかに混ざり合う。

第2曲：輪舞

冒頭の2拍子、ワルツの3拍子、曖昧な拍節感の4拍子の3つのセクションから構成される。木管楽器と弦楽器の伸びやかな響き、チェレスタやハープあるいはトレモロ奏法の軽やかさ、金管楽器と打楽器を中心とした分厚い強烈な響き、そうした異なる音響が対比的に用いられる。

第3曲：行進曲

不気味な反復音型で始まる行進曲では、異なる旋律主題やリズム動機が複雑に入り組み、重なり合った音の層によって分厚いテクスチャが作り出される。マーラーの第6交響曲終楽章をモデルにしたとされ、叩きつけるようなハンマーの一撃はその一例である。

[須藤まりな]

4 Fl (Picc) / 4 Ob (E-Hr) / 4 Cl (Es-Cl) / Bs-Cl / 3 Fg (C-Fg - 6 Hr) / 4 Trp / 4 Trb / CB-Tub - 2 Pairs of Timp - 4 Perc (Bass Drum / Snare Drum / Cym / 2 Tam-Tams / Tenor Drum / Tri / Large Hammer / Glock / Xyl) - 2 Hrp - Cel - Strings (16-14-12-10-8)

初演(1・2楽章のみ)：ベルリン、1923年

初演(全曲)：オルデンブルク、1930年

指揮：アントン・ウェーベルン(1923)/ヨハネス・シューラー(1930)

献上：アルノルト・シェーンベルクの40歳の誕生日に捧ぐ